

研修会「アカヤ自然観察会」

浅間 茂（我孫子市）

雨の天気予報が外れて 10 月 29 日はお天気が良かった。赤谷の生き物村に到着してバスから降りると、シマヘビがヤマアカガエルを食っていたと、自然保護協会の出島誠一氏が話をしていました。近くだというので、案内してもらった。着いた時はまだカエルの頭が少し見えた。飲み込むために盛んに頭をあげている。そして木に登り始めた。すぐに戻って、赤谷ふれあいセンター所長の鈴木綾子氏から赤谷プロジェクトのレクチャーを受けた。午後からは 30 日は雨だというので予定を変更して、旧三国街道を群馬県から新潟県へと出島氏の案内で山歩きをした。上り始めるとすぐにミズナラの木が折れて落ちていた。何だろう？犯人はクマだという。ドングリの実っている木を折って尻に敷きながら食べるという。その敷物が溜まったのがクマ棚である。そう言われて上を見ると、あちこちにあるある。クマ棚だらけである。当然ドングリの実っている木にしかない。食べるものを食べると当然出すものも出す。大きな糞があった。ミズナラやブナの森は多くの生き物を支えている。そのミズナラは根が深く、ブナは根が浅いという。うまく栄養分を分けているものだ。

翌日は天気予報通り朝から雨である。茂倉のダム撤去跡に行かず、赤谷プロジェクトサボーター小鮎守氏らの案内で小出俣の植生見学に行くことになった。ここは人工林を自然林に復元するために、2006 年に幅 20m、30m、40m に伐採し、その後の変化を調べている。雨が降るとカエルも出てくる。アズマヒキガエルとタゴガエルである。この場所(標高 750m 前後)でのカエルの産卵は千葉に比べて 2 ヶ月遅れるという。アカガエルは一年で成体になるが、ここでは活動期間が短いので成体になれないのではと思った。宿の高原しば村に戻り、出島氏のレクチャーでクマ棚をつくるところ・イヌワシの狩り・クマタカなどの映像を見、お昼を食べて台風に向けて千葉へ出発。途中で道の駅「巧みの里」に立ち寄り、無事幕張本郷駅について解散となった。電車は間引き運転であったが動いていた。

今回の研修会が充実したものとなったのは、講師として案内していただいた方々のご協力、また担当幹事の事前準備・お世話によるものです。有り難うございました。



<赤谷研修会に参加して>

中山美代子（市原市）

誘われるままに気軽に参加させて頂きました。入会も浅くて初めての研修に戸惑いを感じていましたが、バスの中の和やかな雰囲気にすぐに解け込め、のんびりと道中を過ごしました。天候に配慮して1日目に旧三国街道を散策し旧跡、目が覚めるような紅葉や三国峠から眺望を楽しみました。

2日目、朝食後、宿舎で「赤谷プロジェクト」の概要、活動状況、赤谷の自然等のレクチャーの後、長靴、雨具の装備で現地に入りし林道を歩きながら受けた説明や目にする風景に次第に関心をもちました。

それは、私が係わっている市原市喜多の里山活動と相似点があるように感じたからです。20年近く管理放棄された里山の再生を模索してきて6年目の市原市喜多の里山の現在と、7年目の「赤谷プロジェクト」に重なる部分があるように思え、係わっている若い方々(その若さ、行動力を羨ましく思い)の説明の一言一句が心地よい刺激となりました。殊に、「人工林を自然林に再生させる」いうプロジェクトには、長期的なサイクルで里山の再生・その林床の植生再生を目指してきた私の目論見に多少とも共通点を見出だせて、このような選択肢もあり得、方法には絶対はないことを理解できたからです。また、赤谷の森に早春にビタミンカラーの黄色の花を付けるアブラチャンが自生し、春の妖精と親しまれているカタクリが咲くことも市原市喜多風呂ノ前の斜面林と同じ植生と思われ共感できました。

今回の赤谷の研修に参加させて頂き、体力・組織力の脆弱な一ボランティア団体とは比較にはならない官と民との協働の大きな団体の活動の現状、課題を目の当たりにし、小さな里山で高齢者の団体ではあるが少しづつ成果を実感でき、その活動が地域に波及し共感を得られつつある今に満足し、出来る範囲で継続して行こうとの思いを新たにすることが出来たのです。

(風呂の前里山保存会 代表 22.11.5)